

絵本論を探して

少年は別の森へ行く（第四回）

灰島 かり

『かいじゅうたちのいるところ』

これまで「少年が森へ行き、クマ（＝他者）と出会い、成長して帰宅する」という絵本の構造を検証してきた。ではこの構造に沿って、著名な絵本を見てみよう。まずは『かいじゅうたちのいるところ』^{（注1）}から。表紙（図1）を見ると、主人公であるマックス少年の姿が見えない。絵本は



（図1 『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック作、神宮輝夫訳、富山房、1975年）

ページ数が少ないために、表紙は内容を紹介する貴重なページでもある。そのためほとんどの絵本では、表紙に主人公が描かれて、内容の一部を担っている。なぜこの絵本は例外なのか？ 筆者はひとつの考察をしているので、興味のある方は、読んでいただきたい。^{（注2）} かいつまんで言うと、表紙の「かいじゅう」はマックスの一部であり、表紙全体がマックスの内面を写すということだ。

皆さんはおそらく、『かいじゅうたちのいるところ』が絵本史上に燦然と輝く傑作であるという評判を聞き飽きるほど聞いていることだろう。一方で「感動を誘わない」というクレームも上がることがある。確かにこの絵本は情緒に訴える作品ではないので、「感動的」という言葉はそぐわないと思う（別の意味では感動的だが）。この絵本が他を圧して屹立する理由は、子どもものとならえ方が、これ以前の絵本とは異なっているからだ。

一言で言うと、センダックはわずか三七ページの楽しい